

本田晃子氏の博士学位申請論文『天体建築論——イワン・レオニドフと紙上の建築プロジェクト』は、1920年代に構成主義建築家として華々しくデビューしたものの、その後ソヴィエト体制に翻弄され、1959年に亡くなるまで終生紙上建築家（ペーパー・アーキテクト）として生きざるをえなかったイワン・レオニドフの建築の理念とその変遷をたどったものである。

一次資料の乏しいなか、本田氏は当時の周辺資料を丹念に掘り起こし、謎に包まれたレオニドフの建築の本質に肉薄する。構成主義から出発し、やがて建築コンペから閉め出され、イデオロギー闘争のなかで糾弾・否定された彼の建築を「建てられざる建築」、すなわち現実の建築に対するオルタナティブとしてのペーパー・アーキテクチャーであったと捉える本田氏の明快な主張は、類書に乏しい今日のアカデミズムのなかにあって、きわめて野心的な労作である。

本論文は注、参考文献を含めて206頁にのぼり、これに加えて139頁におよぶ別冊図版を付す。収められた200有余の図版は、レオニドフの変遷をたどるだけでなく近代建築史をも俯瞰するもので、著者の広い関心を反映した充実した資料集となっている。

本論は全6章からなり、前半の1～3章でレオニドフの前半生を特徴づける構成主義時代の作品を扱い、後半の4～6章では1930年代以降、スターリン体制下でのその建築の変化を考察する。

まず第1章では、一躍彼の名をロシア建築界に知らしめた1927年の卒業制作、レーニン図書館学研究所の設計案が検討される。同時代のマレーヴィチの無対象建築とも響きあうこの設計案から、本田氏は無重力・浮遊感・大地の否定というレオニドフの生涯を貫く重要なコンセプトを取り出し、同時にこの建築が建築雑誌というメディアを通じて受容される新しい空間経験であったと指摘する。構成主義者レオニドフの建築が目的と機能を宙吊りにし、雑誌という紙上に降り立つという論の流れは、紙上建築という本論文のテーマを導く秀逸な導入部をなす。

第2章では、革命的演劇とのかかわりのなかでのレオニドフの新たな建築思考が抽出される。ここで取り上げられるのは現実と舞台を中継する労働者クラブという施設で、ガラスの壁面にニュースを投影したり、演劇・ラジオ・映画を駆使し、通常では考えられない離散的な距離に建物を配したクラブ案のなかに、本田氏はのちのメディア建築論につながる萌芽を見いだしている。

五カ年計画の開始とともにソヴィエト社会では新しい共同体のあり方をめぐって建築界を二分する論争が巻き起こった。第3章ではソツゴロド（社会主義都市）をめぐるこの都市派・非都市派の論争をたどりながら、マグニトゴルスク建設にかかわったレオニドフの理想の都市像が俎上に載せられ、モダンの象徴であるグリッドを基本にしたレオニドフの都市が彼本来の無対象・無重力への志向の延長であり、構成主義理念の結実であったことが明らかにされる。また本田氏は黒地に白で描かれた特異な作図法に映画の原理を読み取り、演劇や映画、ラジオやプラネタリウムなどマスメディアを介したネットワークこそ、彼が思い描いた新たな共同体であったという視点を打ち出している。黒い大地に白く映し出される建築群——論文の副題にある「天体建築」とはプラネタリウムのように地上に映じるアストラルの建築にほかならない。

論文後半では、全体主義のメカニズムと建築が被らざるをえなかった変化に焦点が当てられる。

第4章で本田氏は、1931～32年に4回にわたって審査と再設計を繰り返し、最終的にイオフアン案に落ち着いたソヴィエト宮殿設計コンペのプロセスをたどり直し、この終わりのない反復と再調整の手続きこそがソヴィエト的象徴空間を組織し、社会主義リアリズムを根付かせる過程であったと分析する。至高の高みに引き上げられたレーニン像の解説と併せて、本章ではスターリン文化への転換が資料の綿密な読みによって説得的に跡づけられている。

1930年代以降、その建築が生命の通わない機械的な建築と糾弾されるなか、レオニドフは自分なりの「有機的建築」を模索していた。第5章で本田氏はレオニドフが関わったクリミア半島南岸の保養施設の開発計画などから、1920年代のグリッドに代わって出現する自然の地勢を取り込んだ設計プランや、木目の浮き出たベニヤ板や木片など素材のファクトゥーラ（肌理）を生かした作図法、『一般形態学』で知られるヘッケルへの関心に着目し、そこに幾何学的ではないアモルフな自然の形態へのレオニドフの転機を探っている。

最後の第6章では、建築における社会主義リアリズムの頂点をなす1939年の全連邦農業博覧会と未完に終わったレオニドフの晩年の連作「太陽の都」が対比的に取り上げられる。本田氏は農業博覧会が多民族国家としての連邦の共同体像の絵解きの表象であり、スターリンを光源とする象徴空間の完成であったとすれば、おぼろげに太陽が中空に浮かび、棺に収まった人体とおぼしき像を配したレオニドフの「太陽の都」は生者のネクロポリスというべきものであったろうと指摘する。そして建てられることなく終わったレオニドフの建築がレーニン・スターリンを光源とする太陽都市モスクワへの強烈なアンチテーゼであったと論文を締めくくる。

建てられざる建築に終始したレオニドフの建築は長らく「伝説」という言葉に封じ込められてきた。本論文はその閉塞を打破し、果敢にロシア建築史の空白を埋めようとする。

これまで紙上建築は革命に触発されたユートピア的想像力の産物で、副次的な現象にすぎないと見なされてきた。これにたいして本論文はレオニドフの紙上建築に一貫した意図を読み込み、現実の建築が拠って立つ論理を問い直す契機をはらんでいたことを明らかにする。レオニドフの建築が未完に終わったとすれば、彼の建築が建築の意匠を越え、メディアを介した新しい共同体の理念を抱え込んでいたからであったことが明らかになる。ロシア本国にもこれほど深くレオニドフの作品を分析した研究はなく、本論文の学術的意義はきわめて大きいと言える。

当時の雑誌にも丹念に当たる行き届いた調査、ロシア語文献のみならず、広く欧米の建築や周辺の研究成果への目配り、錯綜した歴史的事実を腑分けする大胆さと繊細さ、そうした確かな資料の吟味から繰り出される明快な論理——いずれをとっても出色の論文となっている。

審査委員からは、レオニドフの現実における格闘が見えてこない、「共同体」という概念が曖昧である、「ファクトゥーラ」への踏み込みが足りない、一部のロシア語解釈に適切さを欠くなどの批判や疑問が出されたが、本論文の学術的価値を損なう重大な瑕疵とは言えないという点で、審査員全員の意見が一致した。

以上により、本審査委員会は本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。